

蜘蛛の糸

芥川龍之介



ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちを、
独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に
咲いている蓮はすの花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中
にある金色きんいろの蕊ずいからは、何とも云えない好よい匂においが、絶間たえまなくあ
たりへ溢あふれて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。
やがて御釈迦様はその池のふちに御佇おたたずみになつて、水の面おもてを
蔽おおつている蓮の葉の間から、ふと下の容ようす子を御覧ごらんになりました。
この極楽の蓮池の下は、丁度地獄じじくの底に当つて居りますから、
水晶すいしやうのような水を透き徹して、三途さんずの河や針の山の景色が、丁
度のぞ覗めがねき眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。
するとその地獄の底に、韃陀多かんだたと云う男が一人、ほかの罪人

と一しよに蠢うごめいている姿が、御眼に止まりました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛くもが一匹、路ばたを這はつて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗むやみにとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報むくいには、出来るなら、この男を地獄か

ら救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、玉のような白蓮しらばすの間から、遙か下にある地獄の底へ、まつすぐにそれを御下おろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしていた韃陀かんだた多でございます。何しろどちらを見ても、まつ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上つているものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云つたらございませぬ。その

上あたりは墓の中のようにしんと静まり返つて、たまに聞えるものと云つては、ただ罪人がつくかすか微たんそくな嘆息ばかりでございませう。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責せめく苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなつていたのでございませう。ですからさすが大泥坊の韃陀多も、やはり血の池の血に咽むせびながら、まるで死にかかった蛙かわすのように、ただもがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。何なにげ気なく韃陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛くもの糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。韃陀多はこれを見ると、思はず手を拍うつて喜びました。この糸に縋すがりついて、どこまでも

のぼって行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましよう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございません。

こう思いましたからかんだた韃陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう云う事には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦あせつて見た所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中に、とうとううち韃陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまいました。そこで仕方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下

りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、かずかぎり数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるであり蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、ばか莫迦のように大きな口を開いたまま、あ眼ばかり動かして居

りました。自分一人でさえ断れきそうな、この細い蜘蛛の糸が、
どうしてあれだけの人数にんずの重みに堪える事が出来ましよう。も
し万一途中で断れたと致きしましたら、折角ここへまでのぼって
来たこの肝腎かんじんな自分までも、元の地獄へ逆落さかおとしに落ちてしまわ
なければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。
が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗
な血の池の底から、うようよと這はい上つて、細く光っている蜘
蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼって参ります。今
の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ち
てしまうのに違いありません。

そこで健陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘
蛛の糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体誰きに尋きいて、のぼって
来た。下りろ。下りろ。」と喚わめきました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下つている所から、ぷつりと音を立てて断れきました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云う間まもなく風を切つて、独楽こまのようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まつさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

御釈迦様おしやかさまは極楽はすいけの蓮池はすいけのふちに立つて、この一部始終しじゆうをじつと見ていらつしやいました。やがて犍陀多かんだたが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、

またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足おみあしのまわりに、ゆらゆらうてな萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊ずいからは、何とも云えない好よい匂においが、絶間たえまなくあたりへ溢あふれて居ります。極楽ももう午ひるに近くなつたのでございましょう。

(大正七年四月十六日)

蜘蛛の糸

蜘蛛の糸

底本：「芥川龍之介全集 2」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和 61）年 10 月 28 日第 1 刷発行
1996（平成 8）年 7 月 15 日第 11 刷発行
親本：筑摩全集類聚版芥川龍之介全集
1971（昭和 46）年 3 月～11 月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997 年 11 月 10 日公開

2005 年 10 月 22 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。